特集・横浜の芸術文化ーアートシティをめざして❷

◎地域の芸術文化活動の展開

①二つの新区誕生イベント
②座談会　地域の芸術文化
ー市民活動と行政・地域とのかかわり

①二つの新区誕生イベント

■鈴木康幸・松岡文和

1ー「青葉物語」～この街を故郷と感じたい
2ー「北極星を探して」の上演～区民、行政はどのような「北極星」を見つけ、探し続けていくのか

1ー「青葉物語」～この街を故郷（ふるさと）と感じたい

❶ー「青葉物語」って？

平成六年十一月の行政区再編成による青葉区誕生を記念して制作された、企画・制作から出演まで、すべて区民による、区民のためのドラマ。オムニバス形式で「大山の見える街」「SOSの届く街」「タヌキと住む街」「公園の多い街」の四話から構成される。一話約四〇分。この他にメイキングビデオと記念誌が制作された。区民有志の青葉物語ドラマ委員会、青葉区役所、東急ケーブルテレビジョンの共催で行われたこの事業は、平成五年五月に始まり、六年四月に撮影開始、十一月に完成した。

❷ーこうして「青葉物語」が始まった

㋐この街を実感できる何かをやりたい

平成元年度から三年間にわたり、区民と区役所、そして地元のCATV局である東急ケーブルテレビジョンの三者の共同で「丘の街いまーむかし」という郷土史番組の制作を行った。三者で行うこの体制がうまく機能し、区民に親しみやすく分かりやすい番組ができあがった。この成功を受けて、同じ体制で今後も何か新しいことができないものか、これまでの経験を生かして何かできないか考えていた。

平成四年秋、郷土史ビデオの編集に区民としてかかわった西田由紀子さんは、区民、区役所、CATV局の三者で今度はどんなことを企画しようか、それぞれの担当者と相談していた。そこで、新区誕生を機に、この街を舞台にした区民が主役のドラマを作りたいという意見が、どこからともなくわいてきたのである。

行政、CATV局、どちらも予算、経験等から見て未知の部分が大きく、また、区民をどれだけ巻き込めるのかなど、越えなければならないハードルが数多くあった。しかし、区民、区役所、CATV局、三者それぞれの情熱をもって一つ一つ問題を解決し、一歩ずつ前進していった。

㋑そして「青葉物語」がはじまった

平成五年五月、様々な分野で活動する区民の有志と青葉区役所、東急ケーブルテレビジョンによる第一回の実行委員会が開かれ、西田さんが委員長に選出された。毎週木曜夜の実行委員会では、ときには激しく議論を交わしながら、ドラマ作りの基礎となる部分を検討

していった。そして、企画・出演・脚本・演出から撮影・編集まですべてに区民がかかわり、撮影は青葉区内オールロケで行うことに決まった。（実際には脚本上の理由で大山ロケを行ったが、それ以外はすべて区内ロケだった。）

最初の半年間のほとんどは、事業の核となる部分を検討する議論に費やした。実行委員は主婦、会社員、音楽家、画家など活動するジャンルが異なっている。それぞれの経験をもとに熱意をもって議論をするから、当然衝突もある。しかも、アドバイザーの元ＮＨＫのチーフプロデューサーを除いては、全員ドラマ作りに関しては素人。論点がずれることもしばしばあった。

ドラマ作りというと撮影現場のイメージが強いが、その準備段階で苦労しているいらだちも重なり非常に苦しい時期であった。しかし、この時期に本音をぶつけあい、時間をかけて議論したことにより、異なる分野で活動していた実行委員同士が共通認識を持つことができたのも事実である。

❸ー「青葉物語」の奇跡

㋐「青葉物語」最初の奇跡

実際にドラマを制作していく上で、キーパーソンとなるのがディレクター。当初ディレクターはプロに依頼しようと考えた。ディレクター次第でドラマの仕上がりが大きく左右されるからだ。ところが、いざ依頼するとなると拘束時間や謝金の問題で到底無理なことがわかった。そこで最初の奇跡である。才能、経験、やる気、時間が必要とされるこの役を実行委員の中の若き女性ピアニストが引き受けてくれたのである。もちろんドラマ制作の経験などない。その分を若さ、感性、前向きな姿勢、体力、根性で補い、ピアノ講師の授業を減らしてまで、連日の撮影打合せ、出演者の本読み、リハーサル、撮影、編集に飛び込んでいったのである。まさに彼女は最初の奇跡であった。

㋑第二の奇跡

第二の奇跡は脚本家である。これだけはプロに頼みたいと区内の脚本家に打診したところ、快くあざみ野在住十六年の脚本家が引き受けてくれた。実行委員の歯に衣着せぬ素人の意見にもめげず、毎週の会議に出席し、脚本以外の内容の会議にも実行委員の一人として参加してくれた。そして、皆の思いを肌で感じ取り、区民として今までの経験をもとに「青葉区を我が街と実感し、ともに輝いていくきっかけとなるドラマ」をコンセプトとした脚本をつくりあげた。

㋒まだまだ続く奇跡

このドラマ制作には多くの区民がかかわっている。区のあるがままの姿を題材にし、見た人が青葉区を見つめ直すきっかけになれば、と始めたこの事業では、制作段階でも多くの区民を巻き込むことを目的としていた。ドラマ制作のＰＲ、出演者募集、スタッフ募集・育成をかねたドラマセミナーに始まり、オーディション、ロケ地選定・交渉、出演者の練習、衣装や大道具、小道具の選定・制作など、休む暇のないスケジュールをこなす区民のパワーには脱帽するばかりであった。参加した区民は延べ三千人をはるかに超え、部会ごとに連日、自主的に活動をしていた。しかも、弁当も交通費も一切出ない。これほどのパワーの結集はまさに奇跡としか言いようがない。

㋓完成、そして……

四月から開始した撮影に、皆、最初は戸惑うこともあったが、しだいに音声、照明、カ

青葉物語なるほどデータ

1．区民参加者		
1　出演者		76名
2　スタッフ		105名
3　エキストラ		110名
4　ロケ地などの協力者		51名
計		342名
オーディション，セミナー参加者も含めると		約700名
延べ人数にすると		3,000名以上
2　ロケーション		
第1話「大山の見える街」	8日間	13カ所
第2話「ＳＯＳの届く街」	7日間	13カ所
第3話「タヌキと住む街」	7日間	11カ所
第4話「公園の多い街」	8日間	9カ所
その他	3日間	4カ所
計	33日間	50カ所

3　挿入曲

テーマ曲を始め挿入曲もすべて区民が作詞・作曲し，歌から演奏，録音・編集まで行った

4　特別出演

第4話「公園の多い街」では区内在住の文学座俳優，川辺久造・松下砂稚子夫妻が出演し，高秀市長と岡本区長（当時）もエキストラとして出演

「タヌキと住む街」撮影シーン

メラ等が板についてくる。記録的な酷暑の中、真っ黒に日焼けしながら一致団結して撮影を進めていく。そして十月、ついに撮影が終了し、編集を経て完成。テーマ音楽「青葉物語～君はいつの時もひとりじゃない～」（公募で最終選考に残った二名の合作）も決定し、ますます盛り上がった。完成試写会では皆泣き、笑い、そして抱き合いながら喜びを分かちあった。

この事業も二年にわたる活動の末、終了した。その後の参加者たちは、友人と新たに活動する者、番組制作会社に就職する者、役者を目指す者などそれぞれの道を進み始めている。しかし、この街に対する思いはきっと同じであろう。

❹―三者の役割

区民、区役所、東急ケーブルテレビジョンの三者はそれぞれの立場で、いかにこの事業を成功させるかに苦労をした。委員長の西田さんは、個性的で世代の異なる参加者たちをいかにまとめていくかに大変苦労された。青葉区役所生涯学習支援係長の金森秀利は、行政主導でなく、区民中心に事業が円滑に進むようサポート役に徹した。また、東急ケーブルテレビジョン編成課長の市来利之さんは、社内での調整に加え、いかに技術的な部分まで区民に参加してもらうか、その指導も含めて大変頭を痛めた。それぞれの立場、役割の中で、時には衝突し、時には思いやり、うまく連係できたことがこの事業の成功した理由である。

＜鈴木＝青葉区地域振興課生涯学習支援係＞

2 「北極星を探して」の上演～区民、行政はどのような「北極星」を見つけ、探し続けていくのか

❶―趣旨・目的

客席までせり出してきたかと錯覚を覚えるほど、混然一体となった舞台に幕が下りると、感極まった出演者やスタッフの涙そして涙……。区民オリジナルミュージカル「北極星（ノーススター）を探して」は足掛け二年近くに及ぶ歴史に幕を閉じた。

「北極星（ノーススター）を探して」は、平成六年十一月の都筑区開設と七年四月の区総合庁舎落成記念事業として七年四月三十日に上演された。主催は、区と区民で構成される「都筑区開設記念事業実行委員会」と同ミュージカルの制作上演に携わる区民による「都筑区総合庁舎落成記念ミュージカル制作・上演委員会」である。区役所は名義上は後援であるが、事業の性格上、名義以上の関与をしていた。

オリジナルミュージカルを上演したいという区民の熱意と、新区にふさわしく、かつ区民の活動が活発な都筑区の特性を生かした事業を実施したいという区の意向が合致して、記念事業としてのミュージカル上演が実現した。

❷―「北極星（ノーススター）を探して」とは

㋐あらすじ

「丘の上の新しい街」の小学生は子供といえど、日々、塾通いや習い事に追われ、夢を失いながら現実への幻滅感ばかり広がっている。

クラスメートのおばあちゃんが寝たきりになり、子供たちの周囲にも高齢化社会の厳しい現実はいや応なくのしかかってくる。

そんな折り、老人は、なぞの転校生が渡した「若返りの秘薬」を飲んで突然若返る。それを知った地域のボスで金儲けには目のない製薬会社の金成（かねなり）社長がしつように薬と転校生をつけ狙う。

そこに転校生を狙う新たな「敵」が登場。それはえたいの知れない小学生風の一団。実は彼らはある星からの「地球見学ツアー」のメンバーだった。その星では「若返り薬」が開発されたが使用について賛否両論で、「高齢化社会の先進国」―地球の視察となったという。

他方、「秘薬」を飲んだ老人は肉体は若返ったが、心の大切なもの「思い出」が消えてしまった。そこで、子供たちや金成社長は「老い」の意味に気づく。お金のためだけでなく、もっと自分らしく生きること。人を大切にし、自分自身を大切にしていくこと。それを知ったとき「年を取らない魔法の薬」への欲求は皆の中から消える。最後に、なぞの転校生と地球ツアーのメンバーは元の星、「北極星のかなたの星」に消えてしまう。

㋑ミュージカルの概要

ミュージカルといえばブロードウェイに代表されるように音楽、踊り、演技、脚本、演出、大道具、小道具、音響、照明など舞台芸術のすべてが総合的に構成されたものであり、「プロ」の世界という印象が強い。

だが、今回は、オリジナルなものを上演したいという数名の活動から始まり、しだいに大きくなり、最終的に出演者、スタッフ総勢百二十名を超える人がこのミュージカルに携わった。当日の音響、照明を除きすべて区民手作りで行われた。前述の原作も区内在住の大学生によるものである。高さ六メートルの巨大なケヤキ、十センチ四方の色布を組み合わせて作った百平方メートルものタペストリー、その他一つ一つの大道具小道具が、デザインから製作まですべて手作りだった。上演当日、照明を受けたそれらは、素人が作ったものとは思えない素晴らしいものであった。

もちろん、上演そのものも大成功。二回の公演は超満員、出演者と観客が一体となりミュージカルが進行し、何とも不思議で気持ちのよい空気が公会堂に流れていた。

❸―区役所のかかわり

区役所は都筑区開設記念事業実行委員会を通じて、事業費総額の約半分にあたる三百万円の補助を行ったほか、地域振興課長、生涯学習支援係長、職員が実行委員会の事務局として運営に参加した。ただし、運営主体はあくまで区民であった。区役所主体で行ったものは、「広報よこはま」による出演者・スタッフ募集、チケット販売の告知、特集記事の掲載、市庁舎で行った記者会見・記者発表などの広報活動、外部機関との連絡調整など、側面からの支援が中心だった。

区役所がかかわることは、行政のバックアップといういわゆる「お墨付を得た」ことで、区民や関係機関へ事業を浸透させやすくなるというメリットがある。その反面、区役所の事業ととらえられて、主役である区民の姿がかすんでしまうという二律背反にも直面した。また、ミュージカルという一般になじみの薄い事業を、区の記念事業にすることが適当かという論議が実施に際し、影響を与えたことも事実である。

行政が文化事業にかかわる際、特に対区民との関係において、どのような哲学をもって実施していくかを深く考えさせられた。

❹―ミュージカル以後の区の文化行政について

都筑区には自ら事業を企画、立案、実施していく能力に富んだ区民が多く、「区民主体の文化活動」が区の特性としてあげられる。ミュージカル以後も、区民が主体となってニューヨークから室内アンサンブルを招いたり、三千名の観客を集めて薪能を上演したりしている。事業のスケールもさることながら、事業実施の過程や事業本体以外で細かな心くばりを見せ、様々な創意工夫をこらしていく様は目を見張るものがある。これも、ミュージカルという総合芸術を成し遂げた自信が、ミュージカルにかかわった区民のみならず、直接はかかわらなかった区民にも、ある種、心の支えとして芽生えているのではないかと思う。

自主的な活動の芽を大切にし育てていくことが、これからの区の文化行政にとりわけ必要になるのではないかと思う。従来ありがちな「行政が文化の供給者」「区民が受給者」ということでは、極論すれば行政はイベントプロモーターでしかなく、啓発的目的をもった事業を除けば、税金を使ってまでその事業を実施する必要があるのかという疑問にぶつかる。

文化行政面での区の体制では地域文化振興担当がなくなり、生涯学習支援係として文化事業を行っているが、生涯学習の中での文化事業の定義がないまま、限られた人員と予算で事業を実施している状況では、多様化する区民のニーズに対応した幅広い文化事業を提供することが、困難な状況に直面している。

一方、区民主体で行う事業は最後の成果のみならず、準備の過程での様々な区民の交流に、その活動の大きな意義と広がりを見いだすことができるのが一番の特色であり、このような活動を支援していくことが行政に求められているといえる。

このような区民の活動状況を受け、都筑区では、平成六年度に区民の事業の自主企画能力を高めるための講座を開き、それを受けて一万人以上を集めたコンサート、フリーマーケットなどを中心に構成されたイベントを実施した。今年度からは、区民が実施する事業に二十万円を上限として補助する「都筑区区民文化活動推進事業」を新設し、区民文化の育成に努めている。

他区をはるかに上回る人口急増に代表されるように、変化の激しい都筑区では、文化行政の実施に際して、柔軟で、冒険的で、なおかつ将来を見据えた施策が求められている。

<松岡＝都筑区地域振興課生涯学習支援係>